

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

# 『ドン・キホーテ』と愛の詩学 : セルバンテスと「わたし」の共同創作

著者	岡村 ビクトル 勇
学位名	博士(文学)
学位記番号	甲第38号
学位授与年月日	2013-03-06
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1085/00001328/">http://id.nii.ac.jp/1085/00001328/</a>



## 『ドン・キホーテ』と愛の詩学 - セルバンテスと「わたし」の共同創作 -

岡村 ビクトル勇

今では最も重要な小説の一つに数えられる『ドン・キホーテ』だが、出版当初から現在の地位を得ていた訳ではない。『ドン・キホーテ』がここまで重要な小説になったのは、読者の様々な解釈により作品が成長を重ねてきたからである。読者による解釈を創作と呼ぶとするならば、『ドン・キホーテ』は読者を創作へ誘う力が強いという帰結が導かれるが、これは偶然だったのだろうか、それとも作者の意図するところだったのだろうか。また、この力は作品の有するどのような性質に由来するのだろうか。

私見では、『ドン・キホーテ』が読者の解釈により豊かな作品になったのは、作者セルバンテスの「読者と共同で創作をしたい」という意図が実現したためであり、読者を創作に誘う力とはセルバンテスの読者に対する愛と、特殊な語り／騙りの技法に由来する。

本稿は性質の異なる二つの部分からなる。最初の三章では、セルバンテスが「読者との共作」を意図していたのか、そして意図していたとするならば、どのような手段で実現しようとしたのかについて考察をおこなった。

次の三章では、筆者が小説の読者の一人として、セルバンテスとの共同創作を試みた。最初の三章が「作者と読者の共同創作」の理論篇にあたり、次の三章が実践編にあたる。

第一章では、『ドン・キホーテ』前篇の序文における、作者から読者への呼びかけを分析した。まずは、セルバンテスが、読者の有する自由意志に言及した上で、「小説に関して好きなように言えばいい」と述べている点を探り上げ、この言葉には「作品の毀誉褒貶はご自由に」という表面的な意味を超えて、読者に自作を積極的に解釈して欲しいという願いが込められているのではないかと主張した。

次に、セルバンテスが「多種多様な読者に向けて作品を書くべきだ」と述べている点を探り上げ、それは作品から様々な解釈を引き出すのが多種多様な読者に他ならないと理解していたからではないかと主張した。

また、読者の多さが作品の質とは関係ないと考え、騎士道物語の人気を作品の真価と無関係としていたセルバンテスが、自作の読者数には大きなこだわりを見せる場面を探り上げ、解釈に開かれているならば、読者の多さは解釈の豊饒生に繋がると認識していたからだと主張した。

第二章では、「書物の書」という異名をとる『ドン・キホーテ』本編に作中人物として登場する読者の役割の分析を通じて、セルバンテスが序文で表明した読者に対する姿勢に嘘偽りがないか、セルバンテスは読者の積極的な解釈を期待していたという筆者の主張に誤りがないかを検証した。

まずは、『前篇』に登場する騎士道物語の読者を分析した。先に紹介した序文中では、「小説の目的は徹頭徹尾、騎士道物語に対する攻撃である」とされていたが、『ドン・キホーテ』

は作者の主張する通り、騎士道物語のパロディに終止する作品なのだろうか。

作中にはドン・キホーテが投宿した旅籠を経営する一家のそれぞれが、騎士道物語の魅力を存分に語る場面があるが、これは作者の言葉と相容れない。また、ドン・キホーテの所有する書物の詮議と焚書の場面では、騎士道物語だというだけで作品が批判されることはなく、その場に立ち会う司祭は別の場面で、「すぐれた才能にとっては格好のジャンルだ」という言葉で騎士道物語を褒めている。

作中の登場人物の言葉による助けもあり、我々は『ドン・キホーテ』が、作者が主張するのとは違って騎士道物語の単なるパロディではないと理解出来る。

こうした記述から、セルバンテスが作中の読者を、時に作者より賢く、小説を理解するのに欠かせない存在として描きたかったことが分かるが、これは現実の読者に対するラブコールとしても機能している。

次に、『前篇』が出版されて大好評を得ているという設定の『後篇』において、作中人物が『前篇』を批評する場面を分析した。ここでは、身分を異にする老若男女による様々な解釈が紹介されているが、セルバンテスは我々現実の読者にも同じことをするように期待したと考えるのが自然だろう。

序文中の「多種多様な読者に向けて作品を書くべきだ」というセルバンテスの言葉を、「読者による多種多様な解釈を期待してのことだ」と筆者は前に説明したが、この論の正当性はこの場面から明らかになるのではないだろうか。

また、『後篇』には『前篇』だけでなく、アベリャネーダなる偽名の人物により一年早く出版された『贋作ドン・キホーテ』とその読者も登場する。読者たちはそろって、ドン・キホーテを単なる狂人、サンチョを愚鈍な人物に矮小化した『贋作』の欠点を指摘するが、特に興味深いのは作中人物の一人が見た、地獄でテニスをする悪魔が登場する夢である。

悪魔はボールの代わりに書物を使ってテニスに興じるのだが、『贋作』は一打ちでバラバラになってしまう。読者のメタファーである悪魔を「時の審判」として描くことで、セルバンテスは読者を小説の命運を握る重要な存在として高く評価していると考えることが出来るだろう。以上、三つの場面の分析から、セルバンテスが読者に敬意を払い、大きな期待を寄せていたことが明らかになった。

第三章では、小説が架空の作家の手を経たことになっている設定を、読者を創作に参加させるための技法として論じた。架空の作家とは、アラビア語で『ドン・キホーテ』を書いた歴史家シデ・ハメテ・ベネンヘーリ、それをスペイン語に訳したモーロ人、さらにそれを編集したセルバンテスの3人であり、他言語、他民族、他宗教による物語の受け渡しが伝言ゲームに酷似していることを明らかにした。そして伝言ゲームにおいて、前のプレイヤーの解答がお題と同じであるとは限らないように、『ドン・キホーテ』においても語り手により「語られたこと」と「実際に起こった」ことが一致しない場合がありうると考えてよいのではないかと提起し、『原ドン・キホーテ』を創作するのが小説の読者の役割だと論じた。

最後に、作者の座から腰を浮かせ、読者に半分譲るセルバンテスの態度を「読者への愛」と呼び、「読者と共作するための創作技法」を「愛の詩学」と名付けた。

先述のように、ここまでの三章が「作者と読者の共同創作」の理論篇にあたり、ここからの三章は実践篇にあたる。十七世紀の文学に繰り返し現れた「人はみな役者」や「この世は舞台」というメタファーを手がかりにして作品を分析し、新たな相貌を浮かび上がらせようと試みた。

第四章では、まずはじめに、『後篇』の十一章において、ドン・キホーテがサンチョに「人はみな役者」というメタファーの意味するところを教える場面を採り上げた。この際に、本来の身分である郷土の代わりに騎士を演じている主人公の口から、このメタファーが発せられた点には特別な注意が必要だとした。

次に、「人はみな役者」というメタファーを有する作品の系譜を辿り、シェイクスピアやカルデロン・デ・ラ・バルカの作品について簡単に言及した。

さらに、日常生活の中に演劇から借用してきた語彙や言い回しが数えきれないほど存在し、我々が知らず知らずの内に生きることと演じることを関連づけていることを指摘した。

最後に、仮面を意味するペルソナという語がどうして人間という意味を持つに至ったか考察し、成長する過程に応じて、人が場面に依拠して様々な社会的人格を演じ分けるようになるからだとした。

第五章では、『前篇』の第一章を分析し、主人公の郷土アロンソ・キハーノが何故、騎士道物語に耽溺し、ついには騎士ドン・キホーテを演じることになったのか考察した。演技というテーマでこの小説を論じる際に、通常問題になるのは、主人公が騎士になってから死の直前に郷土に戻るまでの間だが、本稿ではドン・キホーテになる前とドン・キホーテであることをやめた後に重点を置いた考察をおこなった。

アロンソ・キハーノに関して最も重要なことは、彼の人生があまりにも非「劇的」であったということである。テキストには、彼が恋愛をした、奔放な学生生活を送った、家族をもうけた、リスクの高い商売をした、農作物の出来を気にかけた、遠く離れた土地に旅をした、戦争に参加したなどといった「劇的」な経験をしたという記述は全くない。

アロンソ・キハーノは、善良な人物であったものの、自己愛の欠如ゆえに、家族や友人といった自分を取り巻く自己対象、さらにそれを取り巻く世界を愛することが出来ず、人生において上手く立ち回れなかったのではないだろうか。そして当時のスペインの社会にとって必然性のない郷土という身分であったことも災いして、「非」劇的な人生を送ることになり、充実した人生を送る人物ならば当然無縁であり、運命に振り回されるような悲劇的な人生を送る人物も感じないような空虚感に身を苛まれるようになった。そして、その空虚感を満たすために、最も劇的な文芸作品といってもいい騎士道物語に耽溺することで頭の中を劇場化した。時には騎士に感情移入することで自尊心や恋愛感情を満たし、時には自分が騎士でないことを言い訳に、自己愛の欠如やその他の問題に歪んだ形で納得しようとしていた。

だが、ついに上述の小細工だけでは空虚感を糊塗しきれなくなった郷土は、「人はみな役者」や「この世は舞台」という、古代異教世界と原始キリスト教に端を発する考えを曲解して現状を打開しようとする。「郷土としての自分の役割を上手く演じよ」という帰結が導かれてしかるべき言葉から、「上手く演じられない社会的人格(ペルソナ)を捨てて騎士という別人格

を演じ、同時に世界も都合のいいように認識する」というロジックをひねり出してしまふ。

このように考えると、アロンソ・キハーノからドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャへの変身は、書斎の中で現実逃避をするか、ラ・マンチャの街道で現実逃避するかという消極的な違いであると言えるだろう。しかし、書斎に蟄居して頭の中の騎士道物語世界を生きるという二重の引きこもり生活に比べると、騎士道物語の世界に閉じこもったままとはいえ、外部の世界に足を踏み入れたのは彼にとっては幸いだったかもしれない。

第六章では、騎士を演じようとした男の最期と、彼を看取るサンチョや姪、家政婦の心境、そして主人公と作者セルバンテスの関係の三点を主に論じた。

まず、病床でドン・キホーテからアロンソ・キハーノに戻り、告解をした後に遺言証を作成した主人公に関して、騎士道物語に対する情熱を失ってはいるが抜け殻のようになったのではないこと、演技をやめたのではなく、名前に善人を意味する「エル・ブエーノ」という言葉を付け加え、新たに「正しい演技」を始めたのだと説明した。以前の彼は、年頃の姪をあずかっているにも関わらず、持参金を貯めたり婿を探したりといった父親役をこなすことを放棄し、財産を使い果たすほどの読書狂いを演じるという間違った演技をしていた。後に騎士を演じるというさらにひどい過ちを犯すが、最終的には郷土アロンソ・キハーノを以前とは別人のように演じ、娘に遺産を残す。『ドン・キホーテ』とは、生が劇的な営みであり、「正しく生きること＝正しく演じること」だと主張する物語であるといえないだろうか。

ドン・キホーテに続き、彼が遺言を作成してから最期を迎えるまでの三日間のサンチョたちの心境について、やはり「人はみな役者」というメタファーを切り口に分析した。

ドン・キホーテの病状が深刻だと分かった時から、愁嘆場を演じていたサンチョたちだが、最期の三日間は「サンチョは嬉しそうにし、姪はよく食べ、家政婦はよく飲んだ」とそれまでの悲劇的な様子とは正反対に見える描写がなされており、その理由は「遺産をもらえる喜びが悲しみを和らげるからである」とはっきり説明されている。

しかし、語り手の言葉がサンチョたちの心境を全て言い尽くしていると考えるのは正しいのだろうか。筆者は、先に採り上げた、小説が伝言ゲームのような成り立ちをしているため語り手の言葉は絶対ではないという作品の特徴に加え、作中人物が複雑な心理を有していることを考慮し、「人はみな役者」というモチーフを手がかりに、より深い分析を試みた。

遺産を相続する喜びによって笑みが浮かんだ場面もあるだろうが、サンチョは、遺産を残してくれるドン・キホーテや、介護に携る姪や家政婦を気遣って悲しくない振りをした場面があったとは考えられないだろうか。

また、姪や家政婦が飲食をしたのは、そうしないと看病に必要な体力を養ったり、気分転換が出来なかったからといった考えは出来ないだろうか。あるいは、騎士になった主人に家出をされていた時の所在ない役回りに比べると、看病役とは辛いながらもやりがいのある仕事であり、充実感を感じながら飲食していたとは考えられないだろうか。さらに、看病役の後には、悲しみの遺族を演じなければならないので、喪に服す前に飲食を楽しもうと考えたのではないかなど、様々な解釈が可能だと主張した。

最後に、主人公ドン・キホーテとセルバンテスの関係について論じた。小説の幕引きはド

ン・キホーテの埋葬が行われた直後ではない。この後に、シデ・ハメーテの仮面を被ったセルバンテスが登場し、「自分とドン・キホーテは一体だ」と述べる件がある。

筆者はその理由を、戯曲家として挫折したセルバンテスの人生を踏まえて次のように説明した。騎士道物語を生きようとしたドン・キホーテは、「世界は劇場」という思想を「地で行こう」としたのであり、セルバンテスはその人物についての小説を書いた。ドン・キホーテはセルバンテスの手によらなければ書かれず、セルバンテスはドン・キホーテがいなければ書けなかった。セルバンテスを書いたのは戯曲ではなく小説だったが、ドン・キホーテが役者ならば、セルバンテスが劇作家という、互いに互いを必要とする関係だったのである。

これまでの考察により、『ドン・キホーテ』は「騎士道物語の舞台化の小説化」とでも呼ぶべき作品であり、極めて「劇的な小説」であると結論づけることが出来る。それは、人生を演劇として生きたかった主人公と、劇作家として成功をおさめたかった作家の小説内における邂逅に他ならず、挫折した劇作家の起死回生の跳躍であったと言えるだろう。